

# 2026年度 岡山大学入試解答例 国語

岡山進研学院

問題一 出典 山極寿一『争いばかりの人間たちへ ゴリラの国から』(毎日新聞出版 2024)

問一 ア||砕 イ||裝飾 ウ||腐(る) エ||構築 オ||検索

問二 手ぶりや身ぶりでは、見えない出来事の情報是不確かだったが、道具は使用の痕跡を残すことによつて、出来事を確実な物語として共有できたということ。(二行 73字)

問三 時空を超えて出来事の因果関係を組み立て、意味を与え物語化し、多くの人と共有できるといふ言葉の性質を利用して、社会を重層化すること。(二行 65字)

問四 言葉はつながりを広げても信頼を強めないだけでなく、物語を創つて暴力や戦争を正当化するので、人間を自然の摂理から逸脱させる危険性を持つ、といふこと。(三行 74字)

問五 物語は、互いにわかりあえないことを前提にコミュニケーションを發達させ、社会を重層化させてきたが、感性をもたないAIによつて予測可能な物語へ置き換えられ、人間にとつて生きる上で重要な、不確実だが生きた物語が失われてしまうから。(四行 111字)

問題二 出典 出典 南木佳士『冬物語』（文藝春秋1997）

問一(1) かよさんにとっては、旅館や民宿に卸して収入を得るための生業であり、寝たきりの夫に代わって家計を支えるために続けてきた実務的な営みである。

（二行 68字）

(2) 語り手にとっては、死と向き合う臨床医としての重い日常から逃れ、努力が釣果という形で目に見えて現れることで、明日を生きる活力を与えてくれる人間的な根本活動。

（二行 77字）

問二 安男さんがすでに亡くなっていることである。そう予感したのは、呼びに来たかよさんの足どりに切迫した様子がなく、すでに覚悟を決めた者の虚脱感や諦めを感じ取ったためである。

（二行 83字）

問三 ア 「笑顔を造る途中でふいの涙におおわれながら」に着目すると、長年連れ添った夫の死を落ち着いて受け入れながらも、堪えきれず自然と涙があふれている

（二行 70字）

問三 イ 夫を看取った安堵や介護をやり遂げた充実感および解放感、これからの生活への前向きさ

（二行 40字）

問題三 出典『吉野詣記』三條西公条

問一 ア 歌枕で有名な吉野山の桜を見るのがよいということで私を誘った。

イ 参詣した

ウ 旅程も積もり積もって

エ すぐに帰っても

問二 連歌

問三 愛しい女性の意の「妹」という名を持つ妹背に行けば、亡き妻の面影に出会える  
かもしれないという一縷の望みを持ったから。

(二行 57字)

問四 家に帰り着くまでは、二十日もの長旅に疲れていたものの、友人たちとの別れを  
名残惜しく思ったが、家に帰り着いた後は、旅の話をする妻もなく、孤独に涙す  
るばかりで、老いの域に達した今の自分の人生を振り返り、感慨にふけっている。

(三行 109字)

問題四 出典 司馬遷『史記』

問一 ア あへて（あえて） イ また ウ ひそかに

問二 B

問三 (1) 私はどうして斉に行かないだろうか、いや行く。

(2) 不

問四 かならずここにしすとも、さるあたはず。

問五 重耳が、斉の公女を愛する生活に安住し、斉から去る気がまったくない一方で、公女は、重耳を慕い頼みとする臣下の献身に報い、一国の公子として功業を上げる時は今しかない、という切実な思いがあったから。

(三行 九三字)